

[編集後記]

吉崎亮造

30年という時の長さについて考えてみたい。織田信長・豊臣秀吉の時代、安土桃山時代がおよそ30年間であり、徳川家康による開府から30年後の徳川家光の時代には江戸時代の基礎が完成された。幕末から明治にかけての30年は、明治15～20年であり、明治30年には日清戦争が終わっていた。日本が近代国家の立ち上げにかかった時間である。敗戦後30年の昭和50年頃には列島改造論の田中内閣が倒れ、筑波大学がよちよち歩きをしていた頃である。そして筑波大学は開学30年後には法人化という大きな曲がり角を迎えた。

30年という時の長さは、およそ大学院後期課程を修了してから還暦を迎えるまでの年限である。時の長さを綿花の糸の長さとするなら、数多くの糸が重なり合い、振れ合い一つの綿糸を形成するように、およそ30年という時の長さを持つ人々が集い、紡いできたのが筑波大学である。開学の頃の

苦勞を知る人々がほほいなくなる頃でもある。

筑波大学が開学し、東京教育大学は閉学した。筑波大学は、東京教育大学を筑波の地に移植したわけでもなければ、木に竹を接いだわけでもない。新しい大学の創り出すその熱気と集中力は、おそらく再現は出来ないであろう。平成の時代における国立大学から国立大学法人への移行とは質的な違いがある。「筑波大学の基本構想」という小冊子には、“ここに新たに、公開・学際・責任を三つの柱とする本学建学の理想を明確にし、今後の在り方を方向づけるため「筑波大学の基本構想」を作成した。”とある。

法人化した国立大学はマニュアル化された時代の申し子のようなものである。中期目標・中期計画に沿ってその成果、達成度を数値化して評価しようとしているようである。目標値を高く掲げた大学は、その達成に汲々となる。目標値を安全圏に設定した大学は、運営費交付金の減額の心配もなく、悠々とするであろう。これでは大学はまるで保険会社や販売会社の営業所のようなものである。尻をたたかれない限り、安全な目標値、抽象的な表現を掲げることになる恐れが十分にある。幸いなことに、現在の筑波大学は、「先端的・独創的な知の創出と個性輝く人材の育成を通じて世界に貢献することを使命とする。」ことを目標とし、この実現

のため6つの大きな目標を定めている。(筑波大学ホームページ)

これからの30年間は誰もが予測しうることがある。国内的には少子高齢化の時代であり、国際的には資源の確保競争が激しさを増す時代であり、そして地球規模的には人口増大と自然破壊の深刻化である。忘れていけないことは、この“自然”の中に“人類”も含まれているということである。これまで知の先端を切り拓き、殖産興業の先兵の役割を果たしてきた大学は、人類の持つ欲望と満足の相克に立ち向かうとき、有限な地球という境界条件を考慮せざるを得なくなる。

これまでの30年間、筑波大学は紛れもなく国立大学の変革の先端を担ってきた。これからの30年間筑波大学は、地球規模の変革の嵐の中をこれから進むべき大学の方向を実践する大学となって欲しい。

(よしざき りょうぞう)